

「排除」の論理に境界

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第3部 学習支援(9)

⑧

「勉強しないのに、給食は食べるわけ？」。昨年度、本島内のある中学校の教頭、教師が生徒にそんな言葉を投げかけた。

この学校には目玉設備をサボりがちな生徒が埋め、グループをつくっていた。給食の時間に合せて学校に現れる子も多い。中には家庭で食事を準備してもらえず、まともな食事は給食の1食だけという子もいる。

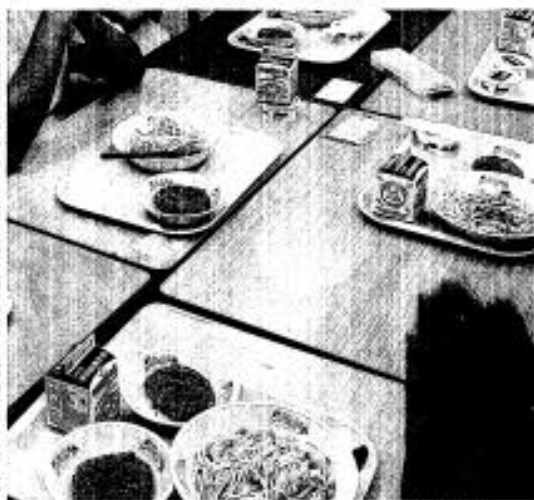
ある日、生徒の一人が配膳中のトレーを持ち去ろうとする。教師が「えー、待て」と手を引く強り、給食は味は劣ってすべとほれた。「お前たちに食べさせる給食はない」と教師に告げられ、その生徒は不登校になったという。

生徒の一人の母親は、問題行動があるたび学校に呼び出され、この子たちにとって学校は怒られてばかりの場所。いい思い出は向もないと思う。たとえ息をつへ、子どもたちが悪い部分も多いが、コンプレックスを抱えたまま発達障がいへの傾向がある子もいる。一律に排除するのでなく、福祉的な視点も取り入れて一人一人、丁寧に向き合ってほしい」と要望する。

問題ある子 背景に家庭環境

県内のある自治体の男性スクールソーシャルワーカーは、学校の対応について「給食を食べさせないことは、子どもの権利を侵害している恐れがある」と指摘する。

別の自治体の女性スクールソーシャルワーカーは「子どもの貧困の問題はかわいそうだから、自暴自棄という次元の話ではない。子どもの人権の問題だと認識する。内閣府「沖縄子どもの貧困緊急対策事業」で多くの市町村に支援員が新たに配置されることに対しては、支援の質



中学校の給食風景―県内（記事の学校とは関係ありません）

本島南部の中学校で生徒指導を担当するスウェーデン男性教師は「問題のある生徒を指導している事例は決して珍しくない。一つの学校だけの話ではない」と

声をひそめる。「警察や司法対応まで進まなければ対処がつかなくなる」と思っている教師は多い。その教師も理解できるが、それでは問題は解決できない」と説明する。

自身もかつては強い生徒指導が有効だと信じてきた。毎朝、校門の前立ち、服装や髪形に違反がある生徒が学校に入るのを拒んだこともあったが道徳非行「型」が多かった時代が徐々に移り変わり、非行も本登校の原因が多様化する中で「排除」の限界を感じるようになったという。

現在はどんな生徒もいったん受け入れ、その子の話を耳を傾けるという方針だ。少しずつ心を開く生徒が増え、自発的に勉強したい」との声も出始めたという。「荒れたり、悪戯を繰り返したりする子のほとんど全員に、家庭環境の問題を「何らかの背景がある。排除の論理を見直す」と子どもたちの貧困の解決につながるのではないかと語る。「子どもの貧困」取材班・田嶋正雄

＝火＝大曜日掲載